

育成アプリ内のバーチャルペットが気分を与える影響

石部千晶

近年では、バーチャルペットや仮想ペットという仮想現実によって作られた非実在の動物を用いたアプリやゲームが増えている。先行研究において、実在する動物には人の気分が良い影響を与える心理的効果があること、非実在のバーチャルペットとの触れ合いにおいても似たような心理的効果がみられることが明らかになっている。しかし、バーチャルペット自体が触れ合いの有無に関わらず心理的効果を有しているかについての検討、およびその効果の大きさについて言及している研究はみられなかった。

そこで、本研究ではバーチャルペットが触れ合いの有無に関わらず心理的効果を発生させるか、また発生した場合の心理的効果の大きさについて検討するために実験を行った。実験参加者をバーチャルペットで遊ぶ群、バーチャルペットを観察する群、ソリティアで遊ぶ群の 3 群に分け、条件の違う群ごとに 2 分間実験を行った。そして実験前後に行った質問紙調査で得た二次元気分尺度の得点を実験前後および群ごとに比較した。その結果、「リラックスした」の項目得点において実験後の遊ぶ群とソリティア群の間に差が認められたことにより、バーチャルペットとの触れ合いが人の感情に影響を与える心理的効果がみられるという仮説①が一部支持された。また、「リラックスした」の項目得点において実験後の観察群とソリティア群、「落ち着いた」の項目得点において実験後の観察群とソリティア群の間に差が認められたことにより、バーチャルペット自体が触れ合いの有無に関わらず心理的効果を発生させるという仮説②も一部支持された。そして、「リラックスした」の項目得点において差が認められた 2 組のうち、観察群とソリティア群の方が項目得点の差が小さかったことから、心理的効果の大きさが育成アプリを遊ぶ群、育成アプリを観察する群、ソリティア群の順に小さくなるという仮説③も一部支持された。

これらの結果から、バーチャルペットとの触れ合いで心理的効果がみられることや、バーチャルペット自体に触れ合いより影響が少ないものの類似した心理的効果があり、それらはバーチャルペットのいないゲームを遊んだ時よりも心理的効果が大きいことが明らかとなった。今後は、感情の統制を喜怒哀楽の 4 つにすること、バーチャルペット自体が自ら活動する育成アプリを使用することにより、バーチャルペットが気分を与える影響について更に検討する必要がある。

大学生における祖父母との関係と性役割認識について

木村智之

本研究は大学生の祖父母との関係が、その性役割認識についてどのような関連があるかについて調べることを目的としているが、その前提として日本での少子高齢化の進行と、ジェンダー意識の改革という二つの課題を踏まえたうえでのものである。今回は大学生と、そのもっとも身近な高齢者である祖父母を対象として、祖父母の性役割認識が孫である大学生にどのように影響するのかについて検討することとした。調査では孫は祖父母との関わりが強いほど、現在の性役割認識が強くなると仮説を立て、それに従って検討を進めた。

調査には google フォームでの質問紙調査を用い、2021 年の 12 月に実施した。回答者は佛教大学に通う大学生 92 名（男性 40 名、女性 52 名）であり、平均年齢は 19.74 歳、標準偏差は 1.27 であった。質問紙には大井・今枝（2019）の「家庭内性役割認識」尺度、田畑ら（1996）の「孫 - 祖父母関係評価」尺度を使用した。「家庭内性役割認識」尺度については再度因子分析を行い、下位因子を構成しなおしてから分析に用いた。

それぞれの下位尺度について必要な操作を行ったのち、相関分析を行った。その結果、男性の「男児男性役割」と「世代継承性促進機能」に有意な相関が認められた。そのほかの因子では男女ともに有意な相関は認められなかった。また男女の回答で独立したサンプルの t 検定を行った。その結果「女兒女性役割」において有意な差がみられた。男性の「男児男性役割」と「世代継承性促進機能」に有意な相関がみられたのは、回答者は自身を祖父と重ね合わせることで、祖父の性役割認識も自身のものであるとした結果であると考察された。

仮説は男性に限って一部支持されたが、女性に有意な関係はなかった。質問項目の再検討やサンプリングの問題、祖父母側への調査など、今後改善すべき点が見つかり、課題を残した。

自己注目に関する研究 ―自己・他者意識との関連―

堤めぐみ

本研究の目的は、自己や他者に対する意識が自己注目とどのように関係しているのかを検討することである。この自己注目という概念には、反芻 (rumination) と省察 (reflection) という二つの側面がある。具体的には以下の仮説を検討した。仮説 1：私的自己意識の程度が高い人は、省察と反芻両方の傾向が高くなる。仮説 2：行動スタイルへの意識の程度が高い人ほど反芻傾向が高くなる。仮説 3：他者に対する内面への意識の程度が高い人は、自己に対する意識の程度も高いので省察と反芻両方の傾向が高くなる。

調査は 2021 年 11 月、B 大学に通う大学生 110 名 (男性 37 名、女性 72 名、無回答 1 名) に Google フォームを用いて質問紙調査を実施した。平均年齢は 20.80 歳であった。質問紙は金子 (2017) の改訂版自己意識尺度、津田 (2010) の視点別意識尺度から他者に対する意識の下位尺度項目、高野・丹野 (2008) の Rumination-Reflection Questionnaire 日本語版からなる 3 パートで構成されていた。

参加者全体における相関分析の結果、仮説 1 に関しては、改訂版自己意識尺度の下位尺度である「私的自己意識」と Rumination-Reflection Questionnaire 日本語版の下位尺度である「省察」、「反芻」との間に強い正の相関がみられ、仮説が支持された。また、仮説 2 に関しては、改訂版自己意識尺度の下位尺度である「行動スタイルへの意識」と「反芻」との間に正の相関がみられ、仮説は支持された。ただし、この関連についての男女ごとの相関分析では男性において正の相関が見られ、女性においては関連がみられなかった。これにより、女性よりも男性のほうが人からの評価を意識する傾向が強いことが考えられる。さらに仮説 3 に関しては、視点別意識尺度の下位尺度である「他者の内面への意識」と「省察」、「反芻」との間に正の相関がみられ、仮説が支持された。以上のことから、自己意識、他者意識ともに特定の下位尺度において自己注目と関連していることがわかった。また仮説 1 において、適応的な自己注目とされる「省察」とともに「反芻」が関連したことで、金子 (2017) の私的自己意識と抑うつには負の相関があるという結果をふまえ、「私的自己意識」と関連している「反芻」は抑うつと結びつく不適応的なものではなく、コーピング方略としての適応的な側面を有するものである可能性が示唆された。

大学生における幼少期のアタッチメントスタイルと友人関係との関連

中田 静空

本研究の目的は、幼少期のアタッチメントスタイルと青年期の友人関係との関連を検討することである。仮説として、幼少期のアタッチメントスタイルが青年期の友人関係に関連があれば、幼少期のアタッチメントスタイルによって青年期の友人関係に違いがみられる。安定型のアタッチメントスタイルでは、友人関係との間には正の相関、不安定型のアタッチメントスタイルでは、負の相関がみられると予測した。

調査は、関西の大学に通う大学生 100 名（男性 26 名，女性 74 名）にインターネットサービスの Google フォームを使用して質問紙調査を実施した。平均年齢は 20.78 ± 1.28 歳であった。質問紙は、佐藤（1993）の親への愛着尺度、酒井（2001）の就学前の母子関係に関する尺度の教示を変えた項目と吉岡（2001）の友人関係尺度を用いた。

相関分析の結果、親への愛着尺度における「安心・依存」は、友人関係尺度のすべてにおいて有意な正の相関がみられた。就学前の母子関係に関する尺度における「就学前の安定的な母子関係」では、友人関係尺度における一部において有意な正の相関がみられた。これは、安定型のアタッチメントスタイルと友人関係の間には正の相関がみられるという仮説を支持する結果となった。また、不安定型においても仮説の一部を支持する結果となったため、回避型とアンビバレント型に分けて考えた。まず、回避型をみると「不信・拒否」では、友人関係尺度のすべてと有意な負の相関がみられた。「就学前の拒否的な母子関係」では、友人関係尺度の「共通」を除きすべてに有意な負の相関がみられた。次にアンビバレント型をみると「分離不安」と「就学前のアンビバレントな母子関係」のどちらでも友人関係尺度との相関はみられなかった。しかし、有意な相関とまではいえないが「分離不安」では、負の相関の傾向がみられるものも多い結果となった。

以上のことから、幼少期のアタッチメントスタイルと青年期の友人関係では、安定型と回避型が友人関係において関連があることが明らかとなった。そして、特に女性において関連がみられる結果となった。これらは、先行研究とも一致する結果が得られ、アタッチメントが安定型であると適応的な友人関係を築ける傾向にあると考えられる。

小・中学生時代における教師との関わり経験
—信頼感および愛着スタイルとの関連—

荻田 夢綺実

本研究の目的は、小・中学校生活における教師との関わり経験と、大学生になった時の自己・他者における信頼感および愛着スタイルとの関連について検証することである。仮説としては、小・中学生時代における教師との関わりにおけるポジティブな経験が多い人ほど、自分への信頼感および他人への信頼感が高くなり、他人に対する不信感が低くなるとともに、見捨てられ不安および親密性の回避が低くなると考えた。

調査は、2021 年の 10 月から 11 月にかけて、私立大学に通う大学生 98 名（男性 36 名、女性 62 名）に質問紙法調査を実施した。平均年齢は 20.39 ± 1.34 歳であった。質問紙は、中井ら（2009）の教師との関わり経験尺度、天貝（1995）の信頼感尺度、中尾ら（2004）の一般他者版成人愛着スタイル尺度についての質問項目からなる 3 パートから構成されていた。

相関分析の結果、教師との関わり経験の尺度である「受容経験」と、信頼感尺度である「自分への信頼」「他人への信頼」に正の相関がみられた。一方で、「受容経験」は、信頼感尺度である「不信」と一般他者版成人愛着スタイルである「見捨てられ不安」「親密性の回避」に負の相関がみられた。また、「傷つき経験」と、信頼感尺度である「不信」と一般他者版成人愛着スタイルである「見捨てられ不安」「親密性の回避」に正の相関がみられた。一方で、「傷つき経験」は、信頼感尺度である「他人への信頼」に負の相関がみられた。一般他者版成人愛着スタイルを「見捨てられ不安」「親密性の回避」の高いもの、低いものをそれぞれ「安定型」「拒絶型」「とらわれ型」「恐れ型」と群分けした。群分けしたものを使用し、分散分析を行った結果、教師との関わり経験の下位尺度「受容経験」において「安定型」が「恐れ型」「とらわれ型」よりも高い得点を示したことが分かった。「傷つき経験」においては「恐れ型」が「拒絶型」「とらわれ型」「安定型」よりも高い得点を示したことが分かった。相関分析と分散分析の結果により、教師との関わりにおけるポジティブな経験が多いほど、大学生になってからの自己・他者信頼感が高くなり、見捨てられ不安や親密な関係性の回避をする傾向は低くなるという仮説が支持された。